

おきなわ・海歩き 第10回
干潟はおもしろい！

鹿谷麻夕（しかたに・まゆ）

干潟で遊んだことがありますか？ サング礁に囲まれた沖縄の島々にも、干潟があります。内湾の奥や河口近くに泥がたまり、岸沿いにマングローブが茂るあたり、そこから沖に向かって泥や砂でできた干潟が広がります。地味な景色で、たいして生きものはいないように見えますが、実はみんな砂の中に隠れています。そんな干潟に住む生きものたちを探してみましょ。

泥まじりの砂の上に、2～3ミリの砂を丸めた粒が無数に盛り上がっていたら、それはミナミコメツキガニの食事の跡。このカニは体がボールのように丸く（写真1）横歩きではなく前を向いて歩きます。数百から数千の群れをつくり、砂を食べながら一斉に歩いて移動していくさまは「軍隊ガニ」と呼ばれることも。小さなはさみでせっせと砂を口に運び、砂の中に混ざった藻類などの栄養分をより分けて、残りかすの砂を丸めて捨てます。人が近づくとあわてて砂の中にもぐりますが、そのもぐり方がおもしろい。ぐるりと回転しながらその場で砂を掘り、ちゃんと自分の上にフタをして隠れてしまいます。しかもその間約3秒のはやわざ！

干潟にはシオマネキの仲間もたくさんいます（写真2）。干潟に降りたらしばらくじっとして下さい。やがて穴から出てきて大きなはさみを振り始めるのが見られるでしょう。はさみが大きいのはオスで、しかも



写真1 ミナミコメツキガニ



写真2 オキナワハクセンシオマネキ（上）とシオマネキ（下）

片方だけ。メスは両方とも小さなはさみです。オスは大きなはさみを懸命にふって、自分の穴のなわばりを守り、メスを呼び込んでいるのです。シオマネキ類は、沖縄島には5～6種類、八重山諸島も合わせると8種類ほどいて、背中の色やはさみの色・かたちなどが違います。ぜひ見比べてみて下さい。ガザミなどが肉食なのに比べて、ミナミコメツキガニやシオマネキの仲間は砂の中からエサを取る、干潟の掃除屋さんです。

干潟には二枚貝もたくさんいます。二枚貝は水中に漂う栄養分をこしとって食べる生きもの。こちらは水を浄化する役目を持ちます。粒の細かい砂地には殻の薄い二枚貝が(写真3)、石ころのごろごろした場所には殻が厚くかたい二枚貝がもぐっています。昔は貝がたくさんとれて、潮干狩りのあとおかずにして食べたという話をよく聞きます。しかし最近では、埋立てなどにより干潟そのものがなくなったり、海の汚れなどが原因でとれる貝が少なくなってきたようです。

さて、干潟の細かい砂の上に、幅5ミリくらいで長さ数十センチの透明なきしめんのような帯が、小さな穴から砂の上に伸びているのを見つけました(写真4)。ぴくぴくと揺れる帯の上には砂が乗っていて、まるでベルトコンベアーのように穴の中に砂が運ばれていきます。ちょっとつくと、あっという間にするっと引っ込んでしまいました。これは何でしょう？

実はユムシという生きものです。試しに砂の中をかなり深く掘ってみると、柔らかいソーセージのようなかたちの生きものが出てきます。干潟には、ユムシの他にも、細長い体をして砂を食べて暮らすものがたくさん住んでいます。干潟の砂や水に



写真3 細かい砂地に住むヘラサギガイ

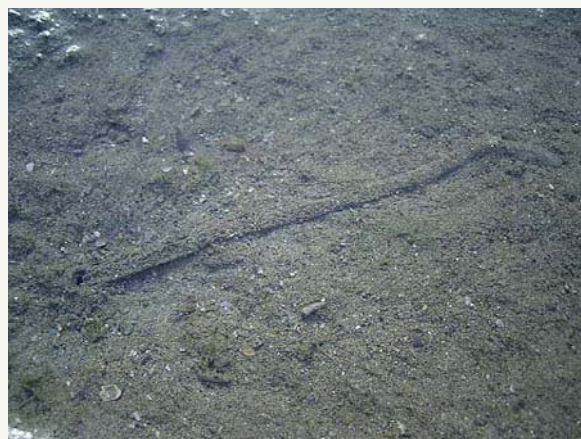


写真4 砂の上を這う長く透明な帯

はたくさんの栄養分が含まれているので、彼らが食べてくれないと臭いドロドロの海になってしまうのです。一見気味の悪い生きものたちですが、砂をきれいにし、さらに砂を掘り返すことで干潟に酸素を行き渡らせて腐らないようにする、干潟を守る大切な住人です。



写真5 ぐりぐり目玉のトントンミー

さて、沖縄の干潟の愛嬌者をご紹介します。方言でトントンミー

と呼ばれるトビハゼの仲間（写真5）。目玉が大きくてユニークな顔。でも動きは素早く、水たまりから水たまりへと、ぴょんぴょん飛び跳ねながら移動し、なかなか捕まえることができません。沖縄島には、背びれに1本長いトゲを立てるトカゲハゼもいます。春先になると、求愛のために2匹で体を思いきり立てて伸び上がるダンスを披露してくれます。

沖縄の干潟は場所も少なく、面積もそれほど大きくはありません。でも、ここにはサンゴ礁や藻場とはまた違った海の役割があり、砂の下にはサンゴ礁には見られない種類の生きものがたくさん暮らしています。この豊富な貝やカニ、ゴカイなどを狙って、さらに大型のカニや、サギなどの水鳥たちがやってきます。

干潟を歩くときは、地面の軟らかさに気をつけてください。うっかり足を踏みだすと、足首以上にずぼっとはまってしまうことも。このときぞうりやサンダルだと脱げてしまうので、長靴がいいでしょう。また、きめの細かい砂の上をはだして歩くのは感触がとても楽しいのですが、最近はゴミやガラスの破片が多くて、残念ながらあまりお勧めできません。子どもたちが泥んこで跳ね回っても安心できる、汚れやゴミのない干潟にするのは、今まで意識せずに川や海にゴミや排水を流してきた私たち大人の役目だなあと思うのです。